
黒猫寓話

しろめのくろねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒猫寓話

【コード】

N8268K

【作者名】

しろめのくろねこ

【あらすじ】

黒猫が一途（…きつと一途！）な恋に溺れる歪メルヘン系物語

(前書き)

グリム童話とか

イソップ物語とか

いろいろあるけれど、とりあえず歪メルヘン系

(メルヘンを土台に狂ったキャラが物語の筋を歪めていく話だと勝手に解釈)

が堪らなく好きです。

気に入っていただけたら幸いです。時代は近世ヨーロッパあたりを目安に想像していただくとわかりやすいかも

それでは召し上がれ

+++++

「ああ黒猫よ君はどうしてそんなにも美しいのだい」

当然ですわ、主人^{マスター}

月の影日の陰、街の闇人の病み
すべてはワタシ
すべてがこの黒猫を美しくする

「もうそろそろ酒場に行かねば。見送りありがとう。」

さよならレディといって主人は去っていった

今宵は月が綺麗だから
きつと酒場は栄えるでしょう

今宵は月が綺麗だから
主人のピアノも機嫌よく綺麗に音をだしてくれるでしょう

ワタシは心の中で十字を切り、偉大なる創造主に主人の成功を祈った

+++++

主人は帰ってくるとワタシを抱き上げて膝に載せた

そのままピアノを演奏する

黒鍵がはねる

白盤がはねる

三拍子のワルツ

酔った主人のお気に入り

でもワタシは不思議だった

主人は営業期間が終わるまではお酒を嗜まない

まだ営業初日なのに

主人からは月桂酒の香がする

「美しい僕の黒猫、聞いておくれよ」

なんですか主人？

ワタシは頭を少し傾けて主人のほろ酔いの顔を見る

「今日素敵な人であつた」

主人の顔はわずかに緩んで

シアワセソウだった

表では寡黙な主人は人前ではめつたに笑わない

でも主人は

笑ったのだろうか

ワタシだけの主人は

その人にピアノを褒められて嬉しそうに笑ったのだろうか

「明日もまた来るそうだ」

そういつて主人はワタシをひとなでするとベッドに潜り込む

ワタシはあわてた

まだおやすみを言われてないわ

まだいい夢をみましようのキスをしてないわ

主人は寝息をたてはじめた

こんなことは人生で初めてだったから

ワタシはにやお、と泣いて木窓から通りへと駆け降りた

+++++

「お嬢さん、美しい黒猫」

ワタシが駆けていると一人の男がワタシを呼び止めた

男は薄汚れたローブをかぶり葡萄酒の空き箱に浅く腰掛けている

「泣いているんだね。好きな男にでもフラれたのかい」
違うわ

ワタシは目を尖らせる

男はにやりと口を曲げる

ああ今日の月と

創造主に右半を隠された弓月と

あんまり似てたから

気持ちが悪くて吐き気がした

「黒猫、君は魔力があるね」

男は素早い動きでワタシの首をつまみあげた

無礼な

ワタシは男を睨んだ

爪をだしてもがくなんて下等な真似は絶対に、しない

「おお、いい目だ」

石油灯が照らす

銀系の髪

それと、眼球がないわ

どうでもいいけど。

「お兄さん気に入っちゃった」

！！

突然布のようなものをあてられて、頭がぼつっとなった

ワタシは意識を失うときに

「しっかりやりな、お嬢さん」という男の声を聞いた

+++++

「あの、大丈夫ですか」

「…主人？」

「え？」

ワタシは身体を起こそうとしてやけに重いことにきづく

「あ……ら？」

見覚えのない色白の肌。

ニンゲンになってる？

ワタシは身体を見下ろした

貧弱な手足、バネの効かない身体つき、ヒゲのない顔

「お嬢さん、お家はどこですか」

もしよければお送りしますよ、と気まづげな主人の声

ワタシはとつさに答えた

「あの、ワタシを雇ってくださいませんか」

さすがに主人の顔が曇る

「お金はいただきません、一生懸命やります。ぜひおそばに置いてください」

ワタシはニンゲンのするように頭を深く下げた

頭がレンガの道についた

ぷっ、と息が漏れる音を聞いてワタシは顔を上げた

「柔らかいんだねえ、君は」

主人は口角をわずかにあげて

「じゃあお願いいたします。」

といった

ワタシは嬉しくて「にゃあ」と言ってしまった

+++++

人の身体は不便であつたけど

ワタシは見ようみまねで家事なるものをした

水は最初怖くて触れなかったが、なれてしまえばただの冷たいナニカだ

溢れる陽光

主人のピアノ

ミルクを煮込んだ匂い

これさえあれば、他になにを望めばいいのかわからない

黒髪をピアノにあわせて振りながら主人に紅茶をいれる

シアワセだった

+++++

「こちら、セルシーエ」

「くんばんは」

主人が女を家に連れてきた

ワタシはぎこちなく挨拶すると急いでキッチンに引っ込んだ

あの女は、例の。

客人と主人用に紅茶を作っていると激しい不快感が湧いた

それでも心を沈めてリビングに通じる扉をノックしようとする

「…ねえ、ピアノを売ってしまっただよ」

手が止まる

「こんなボロ部屋なんて私嫌よ。ここを出て新しい街で生活したいわ」

取っ手に爪を立てる

罵倒の言葉が脳裏に到達した、その瞬間に

「はあい、黒猫のお嬢さん」

…また貴方なの？

「君にいいものをあげる」

がさがさとなにかを掻き分ける音のみがきこえる

なあに、今はそんな気分では…

「いや、きつと」

姿は見えない声はそこで下劣な笑いを響かせる

「君の気分にピッタリなはず」

ぼん、と音がしたかと思うと袋にはいった粉のような薬が目の前でくるくると回りながら片方の紅茶のなかに溶けていく

「これは永遠に眠らせる薬、きつと君なら役にたたせられる」

ワタシはにやりと笑った

+++++

ワタシは部屋に入った

「紅茶をお持ちしました」

紅茶に口をつける二人

「っ…?」

「どうしたの」

「喉が」

そっとうと喉を掻きむしって床に転がるx。

xはxに助けを求める

なんで

なんでワタシじゃなくて

×を選んだの？

だから、こうなっちゃったのよ

×は

×と

×で

×が

×に？

「どうして…」

「なにがですか」

力なく振り向く。

マスターアジャナイホウガ。

「どうして、私じゃなくて…」

ワタシは嗤った

貧弱で醜くて不格好な雌の貴方にはわからないのね、可哀相に

ワタシは主人を抱いた

喉を掻きむしり、白目をむいて絶命した主人を。

「ああ、これですっとワタシのものです」

愛おしみ、頬刷りする

血がワタシの頬も濡らす

オソロイですね、主人

女は目を見開いて驚愕の表情のまま固まっている

「貴方は殺しません」

女の目に見えてホツとした様子

下劣なニンゲンの欲深さにはいつも驚かされる

「いえ、言い方を間違えました。死ぬなんて、楽な逃げ道はもう貴方にはありません」

ああワタシの唇は湾曲し

きつと、真っ赤な半月の如く

「ずっと貴方はワタシと遊んでくださいね」

女はわなわなと唇をふるわす

「永遠に苦しめば？」

主人の首に舌を這わせた瞬間に女は叫びながら家をでていった

別にいいけど

どうせこれから何度も顔を合わせる予定だから、ね

+++++

「不思議な子だねえ、君は」

今度は実在する姿で現れた

「別に大切な主人を殺さなくても女だけを殺せばよかったじゃないか」

嫌なんです

「？」

主人が他の人と話すことが
ずっとワタシとピアノがあるこの部屋だけが世界のすべてであって
欲しかった

「たいしたわがままだ」

これですつと一緒です

「腐っちまうぞ、そのうち」

その前に食べます

「は？」

(後書き)

ワタシの(あ、黒猫口調が移ってしまった)中の黒猫は

優雅で気高く

一途で冷淡

そしてとち狂ってる

そんなイメージです

や、愛は怖いですねー(笑)

では自作で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8268k/>

黒猫寓話

2010年10月14日14時20分発行